

五戸総合病院での研修を終えて

大阪市立大学医学部付属病院卒後臨床研修センター

研修医 2 年目 中本江美

令和 3 年度の 12 月に地域研修の一環として、五戸総合病院で研修を行った。研修科は産婦人科と外科を選択した。

産婦人科研修では、外来研修をメインに行った。子宮頸癌検診をはじめとし、妊婦検診など大学病院ではなかなか研修医期間中に経験できないことを主治医として行うことができた。五戸町には産婦人科医は 1 人しか存在しない。五戸総合病院の産婦人科があるからこそ、地元での出産や婦人科疾患の治療を行うことができると、患者からの厚い信頼や感謝の意見を聞くことができた。1 人での外来診察、病棟管理、手術はできることが限られてくる。しかし、長年の経験や知識から最大限の診療を行われており、地域医療における産婦人科の重要性を再認識することができた。

外科研修では病棟管理及び手術研修を経験した。手術は腹腔鏡下胆嚢摘出術をはじめに悪性腫瘍の開腹・腹腔鏡手術、癒着解除術、粉瘤切除術など多岐に渡る手術を経験することができた。外科研修において一番印象に残ったことは、いかに大学病院での研修が資源的そして人員的に豊富で恵まれていたかということである。五戸総合病院での外科常勤医師は 3 人である。そのうち 1 人は院長であるため、実質の病棟管理や手術は 2 人で管理を行っている。手術は自科麻酔で行い、機械出しや外回りの看護師も外来看護師と手分けして行っていた。大学病院での研修では、自分の専門分野を見つけ、その分野に精通していくかに重きを置いていたが、地域病院ではそういかない。多岐に渡る common disease を外科、内科関係なく診療、治療し、患者の要望に沿った医療を提供していく必要があった。

特に、慢性期のケアは今後の大学病院での研修を続けるにあたって勉強になった。外科病棟で褥瘡や誤嚥性肺炎の患者も診ていたが、どの患者も高齢であり、頻回の入退院を繰り返している。入院時には採血や画像検査など各種検査を行い、適宜治療にあたると思うが、例えば褥瘡患者であれば今後どのような介護ケアを行えば褥瘡発生を防ぐことができるのかということ、訪問診療等を通して尽力されており、大変勉強になった。恥ずかしいことながら、病気発生の予防に必要な知識を普及し、実際に予防できるまでの道のりがいかに大変であるかということ初めて身をもって体感した。

私は令和 4 年度より大阪市立大学医学部付属病院産婦人科学教室への入局が決まっている。卒後 4 年目までは大学での研修がほぼ決まっておらず、その後は院に入り各専門への勉強に励むこととなるであろうが、この五戸総合病院での研修を通して慢性期のケア、そして医師として専門分野以外にも様々な一般診療を行えるよう、日々研修を積んでいく必要があることを改めて認識することができた。

最後に研修中にお世話になった医師、看護師、医療関係者の方々には様々なことを教えていただき、たくさんの刺激を受けた。訪問診療での高齢者やその家族とのコミュニケーションをはじめとして、病棟管理などその他様々な知識を丁寧に教えていただき、本当に感謝している。一部の患者は方言が強く、何を言っているか全く理解できなかったが、患者及び家族が一番良いと思える医療を提供できるようにしていきたい。